

Title	渡辺尚著 ラインの産業革命：原経済圏の成立過程
Sub Title	H. Watanabe, Die industrielle Revolution am Rhein : Entstehung eines Urwirtschaftsraums
Author	村山, 聡
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1989
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.81, No.4 (1989. 1) ,p.729(189)- 733(193)
JaLC DOI	10.14991/001.19890101-0189
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19890101-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



渡辺 尚著

『ラインの産業革命

——原経済圏の成立過程——』

（東洋経済新報社，1987年）

筆者自身述べているように、本書は、筆者の永年の研究成果として、『社会経済史学』、『土地制度史学』、『経営史学』、『北大・経済学研究』、『京大・経済論叢』などに発表された諸論文を「主材料」に、以下紹介するような筆者特有の問題設定のもとにまとめられたものであり、その原稿は、筆者の学位請求論文として京都大学経済学研究科に提出された。本書によって、筆者の個別具体的な研究がひとつのまとまりを持って紹介される形になり、読者は筆者独特の問題意識を鮮明に知ることができる。その本書はすでに、石垣信浩氏（『社会経済史学』53-6（1988））および高橋秀行氏（『経営史学』3（1988））らによって詳しく紹介されており、ここでは、内容全体の概説というよりも、筆者のいう「史的演繹法」という点を中心に、「原経済圏の成立過程」における空間史的側面についての議論を追う形で、本書の特徴を紹介したい。そこで、個々の章において具体的に何が分析されているか、そして、どのような問題設定において、個別の論文あるいはそれぞれの章が結合されているのか、という点を検討していく。

<序章「ドイツ産業革命」論の系譜>では、「ドイツ産業革命」概念が研究史上どのように受容されているかを、日本・東西ドイツを中心に比較し、その時期区分と対象領域をめぐる問題についてまとめている。そこで筆者は、産業革命概念そのものあるいはその実体よりも、まずはその用語の使用法における研究史上の歴史と意味を問うている。次の<第1章「ドイツ資

本主義」の再検討>では、一般的な『ドイツ』史の空間的曖昧さについてまず解説した後に、ライヒが成立した1871年に実施された人口調査の結果である「Statistik des Deutschen Reichs Bd. 2」（以下筆者同様 SDR と略記）を分析の対象に選んでいる。この SDR では、ライヒは、「人口希薄な北ドイツおよび東南ドイツ、この両者に挟まれた人口周密な中央・西南ドイツという三つの地帯に大別」され、さらにその中央・西南ドイツは、「比較的人口希薄な中間地帯によって東部と西部に分離され、東部はさらに二つの、西部は三つの中心地」に区分されている。この SDR の地帯区分を批判的に分析し、さらに1875年の人口調査をも加味することで、筆者は、東部・中部・西部・南部というライヒの4地帯分類を想定し、そこに四つの自立的「経済圏」の存在を仮説的に設定する。その上で、1879年の「綿・亜麻工業アンケート」をその4地域区分に基づいて整理し、「4地域がそれぞれ独自の綿工業立地を持ち、……、しかもそれぞれが自立的発展を遂げたこと」を確認し、「綿工業こそ『ドイツ資本主義』の分裂性を生み出した基本的要因の一つではなかったか」という仮説を立てる。筆者によれば、「綿商品こそ産業編成の無窮動に起動力を与え、その結果独自の産業構造を確立し、これを前提として一つの自立的・資本制経済圏の形成にいたるような、歴史的役割を担いえた商品ではなかったのか」という推定をその分析から導き出せたという。次に<第2章 亜麻から綿へ——事例分析——>という表題のもとに、そこでは従来日本の学界では否定的にしか見られていなかった商人資本の見直しという観点において、ラティンゲンのブリューゲルマン紡績工場を分析対象に選んでいる。その企業活動の発展を、前貸商人から産業資本への転化の典型的な事例として、その経営構造（製造・流通過程）等の個別分析を行い、その転化の過程を、取扱い商品における「亜麻から綿へ」の過程として象徴的に語っている。続く<第3章 構造と空間——ファブリーカとフ

ャクトゥーラ——>では、General-Tabelle der vorzüglichsten Fabriken und Manufacturen in den königlichen Preußischen Provinzen Niederrhein, Cleve, Jülich und Berg, Westphalen und Sachsen, Köln 1820 および Rütger Brüning(Hrsg.), Goswin Krackrügge(Bearb.), Offizielles Adress-Buch für Rheinland=Westphalen, zum Vortheil armer Kranken, 1838 という二種類の統計資料に基づいて、「綿商品によって形成されつつある空間構造の輪郭」をある程度明らかにしようとする、かなり難解な分析を試みている。この章は本書における中間考察ともいえる章である。そして次に、本書で一番長い章となっているのが、<第4章 ラインから大西洋へ——事例分析——>であり、第2章と同様詳細な個別研究に基づく叙述が割り当てられている。そこでは、ライン西インド会社の経営組織・貿易活動さらにその解散の過程が対象となり、丹念な事実分析が論述の基礎となっている。そして次に、それと同様に堅実な歴史学の方法によって、<第5章 地域と政策——商業会議所のライン的形態——>では、1830年代以降ドイツ西北部に成立した多くの商業会議所が対象として取り上げられ、その中でも特にエルバーフェルト・バルメンの商業会議所ならびにケルン商業会議所が詳細に検討されている。そして<第6章 原経済圏の誕生——ドイツ関税同盟かライン河航行協定か——>という挑戦的なタイトルのもとで、筆者は、輸送体系の変革過程、特にライン河輸送の汽力化に着目し、史的検討を重ねた上で、本書のまとめへの導入をはかっている。

本書では、以上の個々の史的分析が、論理的に再構成されることによって相互に結びつけられている。その議論の展開の中軸には、先にも触れた綿工業への筆者の着眼がある。つまり、他の繊維産業とは異なり「一次原料を全面的に輸入に頼らざるをえないため、その立地がすぐれて流通条件によって規定される綿工業」の商品的特性に焦点を絞り、その上で、「本源的蓄

積過程の空間史的側面」に着目しながら議論が進められることになる。この「本源的蓄積過程の空間史的側面」とは、筆者において果たしてどのような内容を持っているものであろうか。筆者の史実解釈の論理を追いながら検討してみよう。

まず第2章で目につく指摘は、「ブリューゲルマン工場の立地が都市工業とも農村工業とも異なる、いわば沿岸工業とでも呼ぶことのできる範疇として把握されるべき」であり、「それは新しい地域形成の可能性を孕んでおり、事実ヨハンが工場立地をクロムフォルトと名づけたことは、工場設立が地域形成の一契機となりうることをかれ自身がすでに認識していたことを物語る」とし、さらに彼が「晩年にライン河輸送の改革に取り組んだことは」、彼の「地域関心が局地的次元を越えて、ライン河の基軸性の認識へと踏み出したことを意味するからである」という点である。ヨハンは「市場開拓を、企業家機能の中でもとりわけ重視」していたのであり、彼は、「生産技術導入において革新的であったばかりでなく、一旦生産態勢が整った後には新市場開拓に企業家努力を集中し、最後に輸送機構の改革に情熱を燃やした」。そして、この「ヨハンの経営努力に窺われる流通過程への傾斜」を、筆者は、国際商品的性格を有する綿花を取扱い、亜麻製品によって築き上げられた伝統的市場構造へ純綿製品を導入しようとするが故に必然的であった、と理解すべきであり、それを「上からの道」の限界を露呈したものとして理解されるべきでない、とする。商業的企業家についての積極的評価にはうなづけるものがあるが、ここで筆者のいう一企業家の「地域関心」とは具体的に何をさすのであろうか。また、筆者は、このブリューゲルマンのクロムフォルト工場が「紡績機械の供給基地」になることにより綿工業の地域的な発展に積極的に寄与したことを示すことによって、商人資本から産業資本への転化の一例のみならず、「ドイツ工業化の起点」という評価を下す。さらに、そのブリ

ューゲルマンが改革教会派に属するというところで、綿業とカルヴィニズムとの親和性を語り、「ドイツ改革教会派に固有の空間認識」を議論に登場させる。それを、筆者は「大陸間貿易を前提とする綿工業は経済空間の不連続的・非一円的拡大をもたらしたが、これは社会的帰属意識が国家よりもすぐれてゲマインデに収斂し、また移住によるゲマインデ形成（コロニザチオン）志向を見せる改革教会派に固有の、不連続的空間意識と共鳴関係に立ちうるからである」と解説しているが、それは極めて興味深い指摘ではあるものの、まだ仮説の域を越えていない。ブリューゲルマンの経営分析に見せた着実な歴史学の方法と、この多少飛躍的な議論との接合は必ずしも整合的とは言えない。また、そこで示される信条の空間史が実際は実にさまざまな位相を持つはずであるにも関わらず、その点、充分議論されているとはいいがたい。（本誌『三田学会雑誌』掲載の評者の論説「ヴッパータール（ウンター・バルメン）における地域信条と社会構成（1816）」では、それに関連した問題を扱っている。）

ブリューゲルマン工場の分析において、「産業資本がまだ発生期の個別的段階、つまり企業次元にとどまっている」ことを示しえたことにすぎないことを確認した筆者は、次章において、違った分析視角から、また対象時期を後ろにずらすことにより、その間の変化を観察しようとしている。そこでは、「ブリューゲルマン工場による点在地域形成とは異なる次元の地域形成現象」が見られることを、ある程度広域の統計分析から立証しようと試みている。この議論における重要な指摘は、「綿業は他繊維産業よりも比較的強い兼業志向を示し、したがって新しい産業編成を創出する起動力が比較的強いことも、推定されうるにいたった」という結論づけである。そこでは、ファブリークの用語法の分析を通じて、さらに「個々の前貸問屋が郡境（ときには県境）を越えて拡大した分業空間に関わり、無数の個別の分業空間が相互に重なり合っ

てる密度の高い綿工業空間を形成するに」いたり、他方で、「一旦前貸問屋の手に集中した経営内・社会的分業の生産物は、問屋商人の連鎖を通して一層広大な外部空間に放出される。ファブリークとは生産空間と市場空間の連結点でもあり、このようなものとしてのファブリークの一般的成立を通して、綿商品によって形成されつつある空間構造の輪郭がおぼろげながらではあるが、すでに浮かび上がってきている」とする。この議論で注目すべき点は「密度の高い綿工業空間」という指摘であるが、ここでもその具体的な内容が必ずしも突き詰められてはいないように思われる。それは質的な意味においてか、それとも量的な意味においてか、あるいはその両方を含むのか。これは、実際、かなり難しい議論だと思われる。

次に本書のおよそ四分の一をしめる第4章で取り上げられたのは、ライン西インド会社であるが、それは1821年にヴッパータール・エルバーフェルトに設立された「株式会社形式をとる総合貿易商社」である。この会社は、「定款でその当初の存続期間を20年と定めていたが、実際には11年間の活動の後1832年に解散して清算会社」となり、その「清算過程は会社創立から解散にいたるまでの期間に匹敵するほどの長期に及び、清算を結了したのは1843年、3月革命勃発のわずか5年前であった」という。この全過程を筆者は克明に追いつけるのであるが、ここでの基本的見解は、その会社の創設者である「アーダース、ベッヒャー、ハーゼンクレーファー三者の協同は、三者三様の思惑の違いから生ずる問題を孕みながらも、アーダースという一人の企業家の個人的現状認識が、7年の歳月を費やして一つの社会的地域意志として析出する契機をなした」という点である。筆者はまた、その場合に、「綿工業の中から一つの実体性をもった空間関心が打ち出されたこと」をも指摘する。アーダースの「地域主義的理念」を強調する筆者は、「地元経済の疲弊に対する深刻な認識」が彼をしてこの貿易会社設立に駆り立て

たとする。しかし、その根拠は、ただ彼の家系的職業的および社会的経歴からの推量である。筆者の紹介によると、アーダースは、「綿・亜麻織布を営む名望家前貸問屋の家に生まれ」、「まずブレーメンで修業を積んだ後、帰郷して家業を継いだ。1793年に同業のヨハン・ハインリヒ・ブリンク Johann Heinrich Brink の娘と結婚している。1799年には31歳の若さでエルバーフェルト市長に選出され、1年の在任期間中に著名な救貧制度の基礎を築いた。その後も判事、市会議員を歴任し、1816～17年の飢饉の際には『エルバーフェルト穀物協会』を創設して、貧民救済に尽力している。企業経営者、市政指導者、社会事業家として若くして名を上げたアーダースの、畢生の事業がRWK（ライン西インド会社＝評者）の創業であった」としている。このアーダースの「地域主義的理念」に関連して、筆者自身も、「その地元認識によって被われる地域の範囲が、どの程度の拡がりを見せるものであったのかという点については、検討の余地があるだろう」と留保している。また、当会社の評議役についての「本店所在地（エルバーフェルト）より12マイル以内」という居住地規定に基づいて、エルバーフェルトを中心に、東北はミュンスター、西南はアーヘン、東南はジーゲン、西北はエメリヒにいたる範囲の地域こそ、「株主代表機関を通して優先的に利益が擁護されるべき空間であった」とし、「地域利益の追求がRWKの本来の事業目標であった」と解釈することが不当ではないとする。しかし、この「利益が擁護されるべき空間」とは具体的に何を意味するのであろうか。それは筆者のいう「地益」という概念の曖昧さにも繋がることのように思える。しかし、「地域利益の追求という事業目的に、株式会社という企業形態が当時の状況下では適合的でない」という地元取引株主の批判的認識が、当会社の解散へと向かわせたという結論は、その「地域利益」の具体性に疑問が残るものの、ある程度有効であり、そこから得た「合目的な地域利益を代表する一般的

地域的輸出機構」についての問いが次章での商業会議所の分析へと向かわせる。

「地域意志の形成がまだ局地的・個別的段階にとどまって」いた状態から、「一つの広域的意志として結合しうる結晶核の生成」へと向かう過程で、1830年代頃、個々の地域に商業会議所は設立された。筆者は、それらの中でもケルン会議所を、ヴッパータールに見られたような産地型会議所と異なり、「ライン河下流域の広域的分業関係から生み出される利益関心の共通項を、典型的な中継会議所としての機能を通して最大限に引き出しえた」と評価する。また、アーヘンとケルンの両会議所のライン鉄道会社の設立をめぐる主導権争いを例に、そのような会議所間の利害の対立は「新しく形成されつつある経済圏の輪郭を見通す上で、重要な意味をもつ」とも指摘している。ここで、本書のはじめにおいて、内容的にもまた分析上もかなり曖昧であったひとつの「経済圏」が次第に明確な形で登場してくる。そして、第6章において、筆者は、「当該経済圏の空間諸規定、すなわち位置、規模、形態等を決定していく上でもっとも根源的な意義を持ちえたのは、まさに河川輸送における生産力上昇ではなかったか」という最後の仮説を提出する。1840年におけるケルンを中心とするライン河の貨物輸送の統計的分析において、筆者は本書で最も具体的な商品流通の実体からその経済圏の存在を明確化し、ライン河輸送の汽力化が新たな産業連関の方向性ならびに産業立地の新しい動向を生み出していく様子を明らかにしている。

以上のように、筆者の「史的演繹法」に基づく一連の分析の過程で、実質上不明確な経済圏も次第に明確に捉えられるようになる。それ故、筆者は、ライン下流域に、1830年代頃出来上がった経済空間、つまり「一つの自立的・資本制経済圏」を原経済圏 *Urwirtschaftsraum* と呼ぼうとしている。この「原経済圏の誕生」をもって、筆者は、「西北ドイツ資本主義」という「ドイツ資本主義」に対する代替案を提出し、

用語としての産業革命概念擁護の立場を取る者として、本書の序章で示した「産業革命を資本の蓄積様式の転換期、すなわち本源的蓄積の最終段階として捉え、したがって歴史的個体としての一つの資本制社会の誕生を宣する。その社会にとっては唯一回のものとして理解する立場を探ろうとするならば、いま必要なことは、イギリス産業革命論の系譜として『ドイツ』で産業革命がいつ起きいつ終わったのかと問うことではなく、産業革命によって生み出されたものはいったい何であったのか、それを『ドイツ資本主義』と名づけることははたして妥当だったのか」という問いに基本的な解答を与えること

が出来たとする。

以上、「経済圏」についての議論がどのように本書で展開されているかという点にのみ絞って、概説を試みた。様々な角度から従来の研究史の通説を「史的演繹法」に基づく推定および仮説をもとに検証・批判していく筆者の論点を、ここですべて紹介することは到底不可能である。今回触れ得なかった個々の論点についても、今後建設的な議論が展開されることを期待するものである。本書はそれほど多面に渡る刺激的労作である。

村山 聡

(経済学部助手)